



Subaru

男声合唱団 ニュース №290 '11. 03. 04

「心のかけはし」特集

資料提供：檀さん

□前回の練習時(2月22日)に檀さんから「心のかけはし」という絵手紙での交流の話と、出版された本の紹介がありましたが、毎日新聞と赤旗にこの本のことが紹介されましたので、その記事を特集します。

発信箱：人を励ますもの＝福岡賢正（毎日新聞2月28日朝刊）

福岡県小郡市に住む三牧英範君と出会ったのは、私が記者になったばかりの28年前。体のマヒと重い知的障害があり、加えて右の眼球は小さくて視力がなく、左目も弱視、時折てんかん発作も起こしていた9歳の彼は、地域の子供たちからひどいじめにあっていた。1年半後、父親の亨さんがハンストに踏み切った。物言えぬわが子を守りたいと、持病の狭心症を押して駅前に座り込み、道行く人々に訴え続ける姿に胸が詰まり、紙面で最大限応援した。けれど2年後に私は転勤し、何度かの手紙や電話でのやり取りの後、いつしか連絡することもなくなって2人のことなど忘れていた。



10日前、そんな私のもとに一冊の新刊が亨さんから届いた。永井喜代子著「心のかけはし」（清風堂書店）。ページをめくると、永井さんが英範君からもらったという手紙の写真が収められていた。私は目を疑った。字を書くどころか満足に話すことすらできなかった彼が、マヒした手でしっかりと文章をつづっているのだから。

きっかけは10年前。便りをくれる友達のいない英範君が郵便配達のバイクの音がするたびにがっかりする様を、亨さんが詩にして新聞に投稿した。それを読んで胸を痛めた永井さんが兵庫から絵手紙を送り始めた。週に一度届く自分宛ての便りに英範君は大喜びし、内容を理解して返事を書きたい一心で言葉を覚え、文字を獲得していった。

本はその10年の軌跡をまとめたものだった。自分のことを気に掛けてくれる者の存在に、人はこんなにも励まされるのだ。

懐かしい小郡の家を訪ねると、そこには私より大きくなった37歳の英範君がいた。「俺のこと、覚えてないよね」

はっきり聞き取れる言葉で彼は答えた。

「ううん。ぼく、覚えてるよ」

24年も放っていたのに。（西部報道部）



潮流（2月28日赤旗朝刊）

「きょうもこなかつた／知的障害ゆえに／友だちはいない 便りも来ない」。

2000年4月、本紙「読者の文芸」欄に載った、福岡県小郡市に住む三牧亨さんの詩です

あてもなく誰かの便りを待つ息子、英範さんをうたう詩に胸を締めつけられ、「絵手紙をおくろう」と思いついた人がいました。兵庫県芦屋市の永井喜代子さん。

さっそく初便りをポストに入れます

両手を広げてあいさつする優しそうなピエロの絵。「絵手紙一年生です。一生けんめい描きますので、お友達になって下さいね」。さあ大変、「やった！」と飛びはね喜ぶ英範さん。亨さんから字の特訓を受け、返事を書きます。「三牧英のりとかいてあったので、うれしかったです…」

以来、交流が続きます。永井さんがカニを食べると、大きなカニの絵でおそそ分け。“憲法九条を守ろう” “核兵器をなくそう”と訴えると、亨さんが英範さんの読み解きを助けます。やがて英範さんは、詩の中で問います。「どうして戦争するのだろう…」

この間、永井さんは二つの大病を乗り越えました。「絵を描くことが生きる力になった」。英範さんについては、亨さんが振り返ります。眠っていた心に灯がともり、気持ちを伝えたい思いが言葉と文字を獲得し、言葉は詩となった、と。

いま80歳の永井さんと37歳の英範さん。永井さんは、交流を『心のかけはし—絵てがみ10年の筆あと』（清風堂書店）にまとめました。2人の懸け橋が、読む人的心にも灯をともすでしょう。



三牧英範さん、大好きな
梅原司平さんと